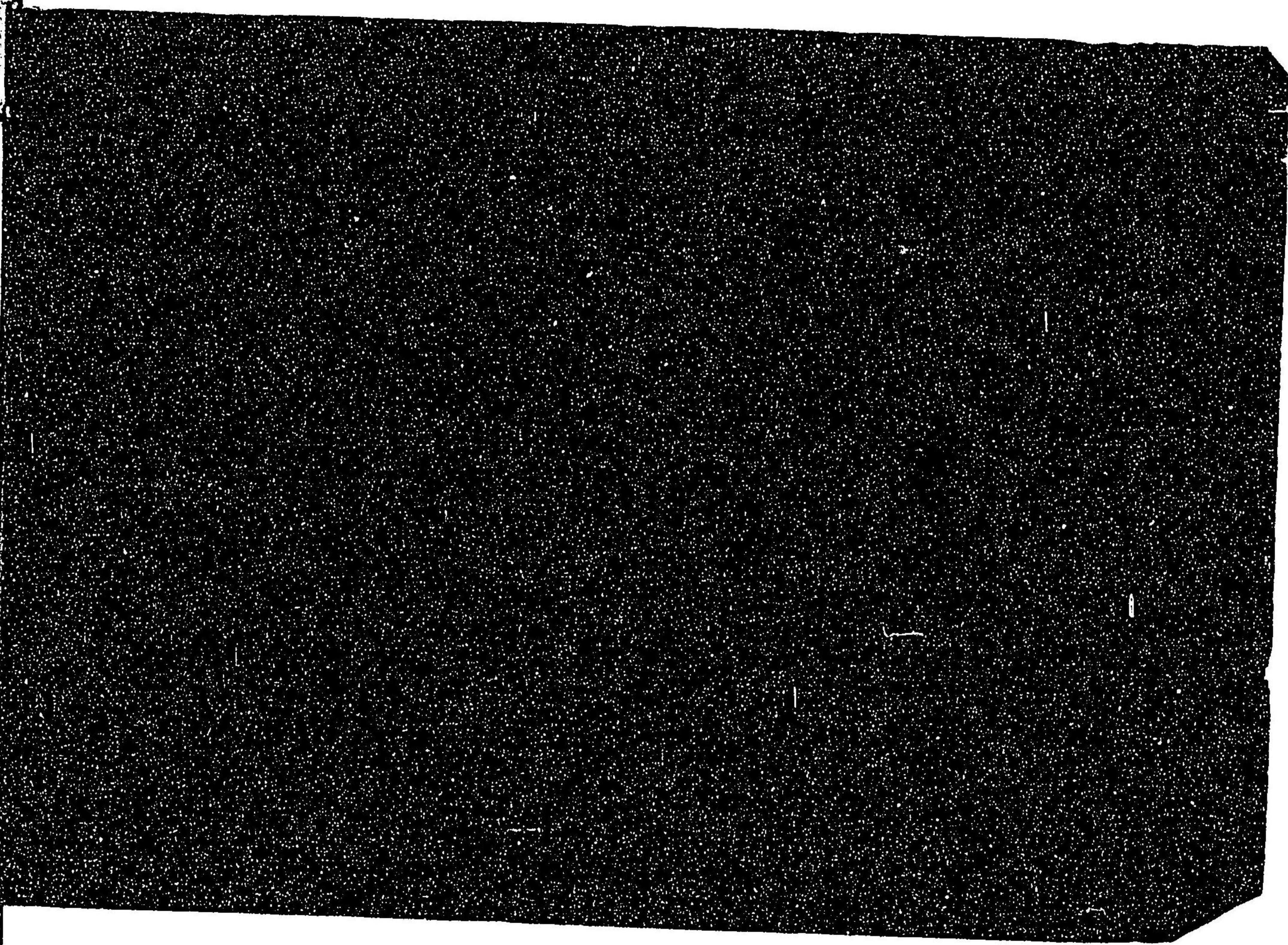
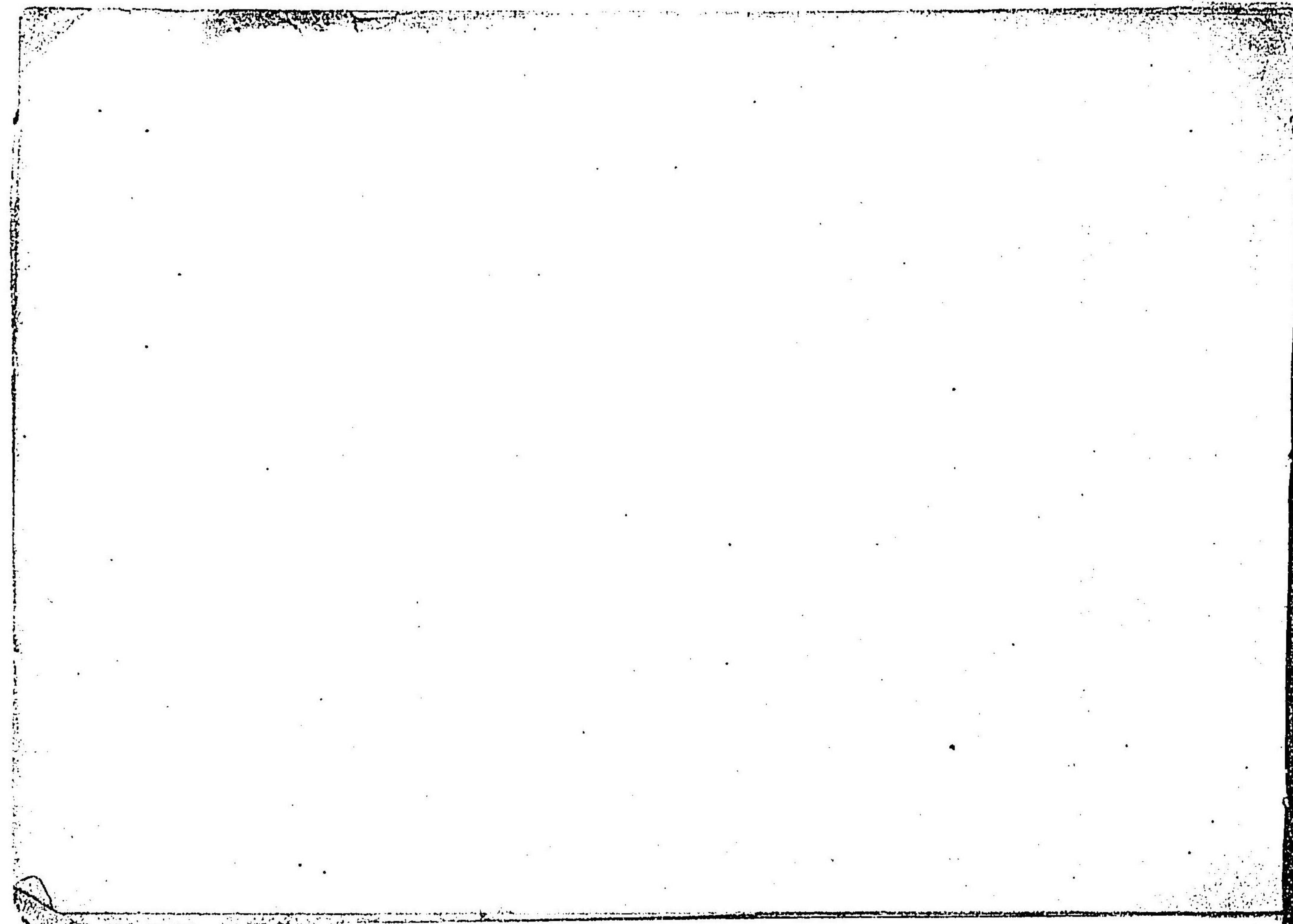


俳優評判記

第十七號

特57.

537



俳優評判記十七號緒言

○該評判記の義最初の發意ハ新富座劇場ハ限り編輯する積の處近頃ハ至り筋書を略し升たハ付外座の評言と附録にして御覽ハ入候處本年ハ新富座興行偶一度ハして當評判記御愛顧の着客様方御待遠の由にて外座斗りよても發兌致す様と版元へ向け毎度の投書殊ハ評言も御投興ハ付版元も利潤事故第十五編にハ市村座と中島座の藝評を差出し升たる處殊の外御意に叶ハ不相替れ賣高にて御評判ハ預りしか又ハ藏入と當込ハ本編も久松座春木座中島座の藝評を御覽ハ入升事に相成升た殊に其座ハの御敵負の見功者方御投書ハ付早ハ編輯に取掛り升てムリ升る

○十六編ハ新富座本年初興行ハ付吉例の通り俳優位付を御覽ハ入升たる處神田多町一丁目岡目八空と云御名前の投書にハ市川左團次(の位)助高屋高助(中村芝翫嵐璃寛)カ下等どハ不承知との御小言ハ誠に五尤モ千万(楚升丈)近頃メキハと藝道上達故年々ハ位を一等づハ進ませ升たガ(高賀丈)芝翫丈ハ家の株斗りでもなく是迄毎度大入の客を呼だ高名手柄も有て舊功もある事故大上上吉の位ハたしかと存らる升又(璃寛丈)ハ東京上り此方ハ手柄も有

升んか何と言ても大坂一方の座頭株先至上上吉ハ至當か
と存らる升扱(廷升丈)腕前之看客を感服させる様ハ成
を升たけかしい事ハ未だシテ役者又成て見物を呼ぶた
る手柄なく始終新富座にてワキ師斗り勤て居らるゝ事故
高名手柄の程が見へ升ぬ故何と全く本人の腕前にて金主
をもうけさせる舞臺を見升た上ハ位置昇進の褒美と付升
でムリ升ぶ記者専断ホて定め升た義ハなく侯間御前負
の衆様ケた不悪御見ゆるしを願

○位附の義と中ノハ八益敷物よて節穴眼連の我輩記者
ケ等級を定め升と申も嗚呼ケ間敷義などと見物の眼よて
極める物よて評判記ハ無てならぬ物故記載し升ケ寛延
三年の春(今ハ百卅四年前)出版の役者大全(八文字合作)
お曰古來の評判上上吉よ至る事甚だ重く然るハ近來役者
の位何となく高く印す様よ成たる事と云々と歎じて有
升が其後文化文政天保時代の俳優も三分津共ハ名人」手
數多有し故位附も自然と高等ハ印す事と成りぬ然るハ
久々中絶の評判記再興いたす時此位付ハ困却し升て
照し合せおする據處なけしハ社中一同投票の上見功者
連の投書お合し著し升た事ハムリ升と粗漏ハ元よりの
事なきハ御見捨なく岡目の御名評と乞願上奉り升

○新富座ハ限り出勤の俳優輩近頃外座へも出勤して是迄
顔合せもせざる若手の役者と混合して勤めらる升故今回
惣役者位附と云物を撰集いたし度候ハ付江湖芝居好の見
功者御連様方當年内を限りハ位附御投與有ん事を願上
貴之三ヶ津惣まくりハ致し度候得共見ぬ役者の位付ハ飯
令彼地の見功者連の力を頼みても傳聞にてハ沓をへだて
ハ痒さかく感無よしもあらずと存升とハ東京府下出勤
の役者丈ハ限るとして編集致し升間來十六年春出版の時
と御待被下睦續御求め御高覽の程を願上

高須 高燕

撰者 梅 素 薫

富田 砂 莚

補助 六二 總 連

○久松座藝評

復古御
世舊其儘

八陳守護城

増補四番續

第二番目

嶙於芳浮名仇討

五幕

- 一 加藤肥後守清正
- 一 千葉の藩中飯塚敷馬
- 一 後津の國屋長治
- 一 磯川軍十郎
- 一 豊倉屋次良吉

片岡 我童

○加藤肥後守清正役此狂言の古來名人士の仕殘されしやかまし物よて今若人の此人より荷が勝過中々無理なる演し物也と初日前より町中の噂よて彼是の評も有しが親御(仁左衛門)丈が勤られた故遣て見度との事の由なるが(親父の時)仕合と可成の入り有しが藝評ハ悪ラムリ升た)自分もまだハまらぬ事ハ合點と見得一所懸命大切よ勤られ場當り杯も仕られ思た方ハ仕て退たと言物か只度胸の能事ハ感心し升た○春雄館毒酒の場拵へハ古來からの紋切形とグット換て嘉珍染の大紋に蛇の目の紋立烏帽子ふて赤塗立の處を團十郎流の桃山譚の風よ仕て顔も肉色よ頬髭よ付て大瀧お作られ升た此拵へハ付種々な評が有升てヤハリ昔々習慣の方が能と言人も有又方今團洲の加藤が看客の目に有て加藤と云人ハア、云人物かと

想像して居る人物も多く有時節故當世劇場の風が一層の
 事宜ろうと云人も有此邊ハ何き可共否共道理を付ける
 堂でも成物故記者も團扇ケ上兼升併し本人も余程心配
 仕られた物と見へ升去なから未清正と云貫目が備らぬ故
 引つくねて不評の方なり○毒酒と知て呑時思入有て口の
 内よて何かブツ〜と唱へ事と云れた様ながあどど大方
 七字の題目でも唱へらきた様お見請升たが本間にさうな
 く甚だ愚痴な仕打英勇らしくも無腹ケ見へて不承知也○
 船の場と赤地錦お黒天と云拵への處を極シミな上下着附
 にて懸も桃山好ふてか馴染の八陣の清正とは見へず新案
 で能と譽らさむせぬチト遺憾な場合無よしも有すで又
 此場小可笑な事の有ハ鞠川玄番(丸重)ケ例の通り小船お
 乗て清正の様子を見届お來り清正の無事成を見て「ハテ
 めんやうな同ト鈍子の犬 孟 森三左衛門ハ」云々の紋切
 形の臺詞と云を升たが今回と新案おて毒酒の器ハ瓶子土
 盆にて仕らきた故爰のせりふも云替させたら宜ろうよ一
 向氣無の役者輩なり○毒の回り工合杯もさしたる可否も
 なし鞠川ケ置て行た具足櫃も忍の者有事を知つて是を顯
 ハし扱打よ切て落す處も從前は居合扱ケ遣ひ相な大太刀
 を遣うが此場の眼目よて此太刀打を甲のは斯乙のは斯と

批評した物也しヶ今回は正眞の太刀故一向引立ず離衣よ
 扱身よ水を掛させ是を拭ひ清めぬの船唄うたへ〜の處を
 船の船先を見せぐるりと船を廻し裏を見せる舞臺は大仕
 掛なるが本人ハ大舞臺との譽兼升た○本城の場爰の拵へ
 と古今六ツヶ敷處よて先年親御の時と最初鼠の忍を押へ
 ての出ケ大百日病鉢巻羽織着流し故寺子屋の松王丸丸出
 し後鎧出立よ成てからの小栗柄の光秀よ見ぬ幕切天守へ
 登り兜を冠つた姿よ成て漸々清正らしく成た故當時の惡
 口よ松王日向守清正と云評也しが今回ハ其難と有ません
 でした○額も薄く毛ケ生髭も延たる處吉然し頬髭ケ口の
 端へ下つて糸の仙人見た様な處も有升た仕打も中々骨折
 て仕らと升たが何分無理な役故骨折損の草外もうけよて
 看物の腹へ應へず以來斯様な役ハ任なさらぬケ吉(殊に
 女請もせず)年功の後ゆる〜仕て見るケ上分別〜○
 天主へ登り妙法の旗を持兜を冠り木像の形相を見る處も
 さして評する事なし

○二番目夢の場飯塚敷馬役サア斯成たら此人の物富本淨
 るりにて花道ハ文を見ながら少女お梅(鶴藏)よ連らきて
 の出色氣とさざけをなひ交の拙梅無類〜着附も同じ事
 なり戸村新七が又出たかと思とを升た○後およしと寐て

居處を勝間主膳(照藏)に見付らる覺悟を極め討きんとするを不義を隠しお芳を吳て立退せる主膳の義心を感じ引込よ成處迄申分なし○後津の國長治と成て兩國の駕屋の智ふなり煩て居處此病人へ拵へ万端仕打まで申分なし能出來升た○曲り鉄堤討きの場へ駕よ乗ての出病後と云よハチト強過る様よ見へ升九拵へも今一息工風有たい様也○二役磯川軍十郎の敵役早替り長次の吹替を殺し辻堂の川拵へハ先一通りおて吉長次に向ひ息有内に聞して遣と悪事を語り盗た茶入を出し見せる時見せびらかす振事ハ堂かすると坂府生をの役者ハする事成が安つボク見へて悪い物です斯様な事ハ成丈せぬ様よ心懸たい物なり千太(彦十郎)が來りたるよ驚き一端辻堂へ隠れト、拔足トて花道へ逃行小柄を手裏劔よ打ての引込爰らの處も三枚目敵のその様な安イ仕草を仕なさるケ仕せ共の事なり五注意――○大森梅屋敷の場拵へ万事申分なし我をねらふお芳とも知らず邑仕掛にするを乗込駿河屋へ引連酒宴の處今少し否身に色氣を加へてはしかつた○鈴が森の場拵へ乗らる熱酔の体足を投出し口を明て寐てゐるのよかつた後敵と名乗お芳よ討る、迄此場は随分能して居らる升た併し酒の酔の覺様ハ早い様でした

○豊倉亭主次良吉可成の出來着附も荒い島の廣袖ななどを着ぬ様よ成をしハ感心――お芳が梅見ハ行度と云願を敵討也と見抜衣類よ年季証文小差物迄吳て遣る男達肌の仕打宜こなさを升た○幕切に立て延をする處此幕切の仕打ハ先年(田の助)子持高尾の時三浦屋の亭主の時も幕切よ立て延をしられ升たか女郎屋の亭主ケ女郎よ暇を遣時ハのびをする物と心得たケ何よしろ面白からぬ仕打と云べし○敵討の場へ欠付來りお芳の自害を留る處ハさしたる事なく次良吉と女房(三津太郎)との釣合わしく今一息遊び屋亭主らしく有た併し役を夫々仕分る處ハ達者

一北島春雄公
一船頭灘右衛門
一實ハ五島又兵衛政次
一駕屋 千太

坂東彦十郎

○北島春雄役拵へハ例も白髪の棒茶筌塗落しと覺て居升たケ今回ハ惣髪よ仕らる殊よ人品も悪敷師直位よしか見へず○森三左衛門の諫言も聞入ず手強い仕打も人物がとまらぬ故チト答へ兼升た
○船頭灘右衛門實ハ五藤又兵衛政次此役ハ(仲藏)病氣よて代て勤めらる升たケ船頭の間ハさしたる事なし後五藤又兵衛と成てから中々大手よ仕らる升た○ノリ地に成て

久松の五

からも余り跡をいごかさぜよ仕らさたハ請升た花道の引込跡へ残つて六法の引込と甘い物爰らを見と役者を仕上たど見へたり

○駕屋千太役駕屋の場玉木屋の煮豆の曲物を下て黒の半天よての出大さよ吉お芳の身賣の處も此人の方げせけんより口數が多くて今少し穩當よし折角の主思ひの篤實ヶ薄く成て残念今の(仲藏丈)の當藝故目に殘て居升から譽られ升んの先々出來の能方なり○曲り鉄の場親方の死骸よつまづき介抱して居内人影の見ゆるよ捕へんとしてト、小柄を打きての幕さらりと吉幕べりてから突然幕を上て軍十郎の跡追處此幕分出る處場當りハし升たがなせあんな事をしなすつた物ウ○豊倉の場お芳よ出逢親方の變死を咄す處も相應よ吉別を際よ翌待合す處と大森の山本の梅園だよ忘となさんなとメを押事が余り芥蠅引込だかと思ふと又出て來て同ト事を云なさるがチト場當り過升○山本の場々大森鈴が森敵討迄始終見へ隠さよ付て居て後よ敷れ中々出てハ手助けをしてハ引込處ハ持前よて仕られ見物を嬉しからせ升た達者物

○豊倉廻し客の内甲州の田舎大盡手一ぱいよ遣きて可笑からせ升たがチト甘過て利口よ成て悪し殊よ國言葉も諸

國ごたませの様で有升た

一加藤主斗之助清郷
一内千島之正義弘
一勝間要之助

市川 姉 藏

○八陣よ加藤主斗之助清郷役若衆姿へとまり悪く不評で有升た仕打も十分ならず

○仲藏病氣よて(彦十郎)五藤の代り故大内千嶋之正義弘の代り役人物ハ可成とまり升たげさして評とる出來なし
○二番目よ勝間要之助役津の國內へ來り長治よ茶入の件を談する立役さしたる役も無きと人品のとまり能さら

〜と仕らきてよし大切敵討の場へ(秀五郎)が代りよて顔を出ささず堂でも云と云役なるが兎も角も自分ハ名題役者故場が立派よ成て(秀五郎)ハ引立升あよ面到てもかよふな處ハ勤て出るやうよ心掛て下され別人の様よて甚悪し

○豊倉廻し客の内店者の番頭上方言葉よて人物のとまりも能大出來一日の内一の出來併し何商賣か知んが紺織色と嶋と両面の前掛をめて居て床の上よ居つてゞしたがあさハどんな物か

○片岡丸童(八陣)翰川玄番さしたる事なし○廻し客の内酢豆腐の好成と云通客役ハ形の好通客でハなく小栗實

記の業平屋の方へ近い様なり○軍十郎家来さしたる事なし○市川團六(醫者天庵出来よし)○坂東薪車(廻し客の内國侍以達者に能こなされ升た

一森可成妻まがらみ
一豊倉女房おたき

坂東 三津太郎

○義成妻しからみさしたる事なし

二番目よ豊倉女房お瀬津の國の場花道よりの出今一息草臥た仕打有たし(股のすれた思入も有て吉肥て居るから)お芳を買處もさらしと吉○豊倉の場亭主(我童)故老女房よ見へて悪かつた

○坂東鶴藏(勝間の下仕お梅役夢の場一寸愛敬み手踊り五苦勞)彦十郎丈(悴の由能仕出しの娘方落付て本座の出勤か肝要)

一森三左衛門可成
一清正妻葉末
一勝間主膳

市川 照藏

○八陣よ(仲藏)病氣よて森三左衛門の代り役何でも引請てこなさるゝ重寶役者○拵へ万端申分なし人跡もとまり能毒酒と知て天益を引請呑るゝ處相應よこなされ升た清正立歸つて毒の廻りし思入よて春雄の心中を見透し諫言の處吉ト、聞入さるゝ腹切よ成處爰と云て難する處もなく十分よこなさを升た

○清正妻葉末役毎度加役を引請て重寶よこなされ升た此役よして仕業ハ無ケ加役でハ無理よて何かとまり悪敷不評の方で有升た

○二番目よ勝間主膳役泊り番を急よ御用よて歸郎なしたる處妾芳の處へ敷馬ケ忍びおるを見付熊と明りを消て兩人を逃し遣ると言役拵へも申分なく人品も有て中よ能くこなされ升た

○豊倉廻し客の内手廻りの親方太吉此役ハ大出来よて廻し客の内一の當り人物もとまり能く氣込も申分なし大請で有升たおよしの來ぬ内腹を立て歸るゝと言なげら度一帯を直す處よし口併し恨みなるハ縋絆ケ短くて見悪らムり升た親分株の人ハ縋絆ハ殊に長く此人のハ丈ケ四五寸長くしてはしい様でした此縋絆の外ハ一寸の申分もなし(チット四五寸の申分たつけ)

一森三左衛門娘雛衣
一主膳妾お芳
一長治女房およし
後豊倉抱餅およし

尾上 多賀之丞

○八陣よ娘雛衣役毒酒の場拵へ万端申分なし主斗之助よ色合の處さしたる事なし此場ハとして斯と評する處なし○船の場美しい事ゝ琴も余程替古ケ積で昨年の朝顔の時より上手よ成を升た五勉強ゝ○清正の毒よ苦しみ様

子の變しよ驚き氣扱ひの處申分なし○本城の塲さわりよ成てから躰の大きいよ似合ず和らかな事ハ感伏し升た後自害して死ぬる迄斯様なお姫様役ハ方今外よ仕人なし大出来

○蝶於芳浮名仇討にお芳役序幕富本浄るり夢の塲勝間の妾お芳よて數馬を忍べせ濡事の塲拵へハ黒の紋付ハ上品よて吉おしい事よハ(我童)が小兵なのよ此人ハ躰ケ大きい性故雁金額でハあるし少し老て見へしハ殘念何となくお富典三郎の忍の塲は様な風情よ見へ升た○富本浄るりよて兩人とも色氣ハ十分有り申分無の出合で有升た口とは申物の(我童)との出合も毎度の事故堂も目先が變ずヤンヤとハ云升んでした○床の間よ有し三味縁を取てカセよして一寸振事有升たが此三絃ハ堂有うか藝者でハ無外よ何ぞ思ひ付な小道具が有相な物なり○後主膳より腹に成兩人手を引合花道の引廻迄申分ハ少も無で有升た○兩國津の國の塲夫長治の看病勞れよて寐て居て夢を見たる處此塲に成てハ赤ッ氣が無なりいよ一老て見へて遺憾で有升た○穴熊の三五郎(薪車)權次(由藏)勘太(多賀藏)三人の博徒ケ入來り昔の賭仲間的事を言てゆするを昔の性根を顯す處宜ふり升た○夫長治の病氣よ吞せる藥

代と夫ケ日頃尋る茶入の代價都合百兩の金の才角よ苦しみ居る處へせげん傳八(丸童)豊倉の女房(三津太郎)兩人駕を頼入來り奉公人を抱る事よ出て來たケ冗足よ成たどの小言を聞我身を女郎よ賣と云事よ心付是方傳八ハ豫て懇意故身賣を頼む處早速相談決着して夫にハ内々よて爺イヤアの千太の歸りを待て取引せんと兩人を奥へ通し待せる内千太(彦十郎)歸り來るよ始終を咄す處迄昔ハ徒ら娘也しけ今ハ夫の爲よ貞節を盡すと云万々の仕打中々宜して居られ升た○千太が親方の病氣を案事金比羅撥の御鬨を取て來た處大凶ケ出た事故是は見せまいと咄掛て止る處無理に此御鬨を引たくり見る處杯ハ我身の爲に働いて呉る爺イヤアと氣を置ぬ摺梅此情合なと強氣お能出來升た感心一○夫が千太よ跡を頼み山んとするを長治よ考付れ是方一寸身賣の別れよ成處もさら一として情合有て宜ふり升た○此身賣に成て眉毛が無故堂も老て見へて直打ケなく實よ柄の大きいのケ幾分りの損にて只振事よて情合を見せらるゝの故骨折ハ十分見へ升お功者な事(形ちが女よハ無理な性是は無據無)今少し瘦方よてわらば鬼よ鉄棒ならんよ(爰らケ夫二物をあたへずか)○豊倉の塲當狂言ハ先代の(田之助)の躰を見て書た脚色ハ

大當成じが(梅花子)よいせんな物か免角斯言イナせな事
 が好よて演さるゝの悪イ了簡躰よままつた時代狂言かな
 を見たらと悪評して居升たが扱見れの中々感心恩たよ
 り上評の方ふて悪落の處も無ハお手柄と譽て可なり殊よ
 見物が眼目と目を付る處ハ豊倉の回し床よて昔ハ知す
 (坂東しうか)の白糸が最初よて其後追々誰彼も演する様
 よ成た物よて先女形の情合ハ薄い物よて昔の太夫さんよ
 ハ到底なき余りヤンヤと譽れぬ狂言なるが近年ハ女形の
 情よハづれた越向の物追〜と新作なつて看容も又何共
 思ハぬ様よ成しハ時勢のしからしむる物が○先理屈は此
 位よして最初の山ヶ(薪車)の國侍ハの處着附の好ハ相應
 鬘ハ洗髮の思ひ付余り大層過てチト幽靈然として見へた
 り(姉藏)の店者の出合ハ大坂産と云なしあんな詞是ハ彼
 地長らく修行の事故手よ入た物口手廻り頭太吉(照藏)の
 出合ハ髪を直し結び髪よ成たる處大さよ吉此せりかハ大
 イナ也莫連の振事も能こなされ升た○(彦十郎)の甲州大
 盡の相手も申分なし通客(丸童)の座敷ハグント氣を替風
 流好の調子感心併し並び方ハ俳借師(多賀榮)太こ持(瀧
 三良)と並んで居られ升たハ悪し客人の上手へ過つて居
 つて卒しかつた○ぢいヤアの千太が來り明部屋よての出

合夫長治の横死を聞處ハくやしがり様ヶ不足今少し憤つ
 てはし、道具替つてお部屋の間お内室へ梅見ハ行度と暇
 を願處々亭主次良吉よ敵討と覺られ異見よ逢ト、暇を貰
 ひ其上合口へ年季証文を添て貰ひ悦々幕切迄申分無に出
 來升た○大森梅園の場拵へも申分無赤い長縹絆ヶぞろり
 と出て居處も媚妓然としてよかつた段々色摸様にて軍十
 郎またぐり付道具替り駿河屋酒盛の場も吉○徳利のあつ
 いと云心持よて縹絆の袖にて持ハ一寸宜ムり升たが夢の
 場でも仕なすつたから再度ハくとい様です口刀の鯉口を
 下緒で縛られ升たがあれハ(田之助)の時の様に中間呑助
 (雁八)ヶ彈た三味糸を取てくつた方が思ひ付げよか
 つた○鈴ヶ森敵討の場名乗掛て勝負を仕升ヶ一ト刀だま
 し討よ遣て置て名乗た方ヶ宜かと思升度胸ヶ能とて女の
 事也相手ハ酔て居も武士の事故チト強過る仕打かと思ひ
 升た縹絆の袖ヶちぎれてお詔への大蛇の彫物ヶ見へる處
 ハ宜ムり升たト、首尾能敵を討迄始終申分無先上評と申
 ても詰負眼でハ無かと思ハれ升去ながら斯ハ譽る物の今
 回の狂言ハ一二共時代物かなんぞよて此人得意の腕前に
 て眞身入見物を泣せると云締つた場無夫故兎角不評よて
 中途よて休よなり升たが残念でムり升た

一森三左衛門可成

中村 仲藏

一豊倉亭主次郎吉

○初日前より人力車より落て怪我を仕られたとて出勤なく
 三左衛門を(照藏)より代りさせ五藤政次(彦十郎)代り
 也し廿九月廿五日より出勤となり三左衛門を勤め五藤ハ
 ヤハリ(彦十郎)へ譲つた儘よて二番目の豊倉の亭主を(我童)より貫て出られしが適ハ老功感心な物(我童)とハ行方違つて酒を飲ながら異見をして後に暇を還るゝ處何も譯も無處なれど甘味ハ又格別な事口併し人物ハ妓夫ケ出世した様だとも悪口ハ有たれど仕打よおいてハ別格

□森三左衛門も仕打よおいてハ一點の申分無ですケ堂も老人過るのと品格の薄いのケ申分なり何よしろ出勤間もなく芝居休になりしハ残念

春木座藝評

八千八町 桶挾間鳴海軍談 点取本四册
 席開榮

亦人形の袖振か何れも様の思召も如何と辞退致せしを當所よ近き神垣ふ由縁もあればと再應のお進め故よどり敢ず太鼓櫓の繁榮を願ひの主ハ八百屋於七

松竹梅湯島掛額 三幕

太鼓櫓の其跡へ鼓のしらべ忠信が今を初音の御目見得ハ折も吉野よ因ある調度春木の花櫓時侯違ひも願見す
 松竹梅の額に基き 義經千本櫻 二幕

- 一 賤の女お玉
 - 一 稲垣小太郎
 - 一 佐藤四郎兵衛忠信
 - 一 源九郎 狐
- 市川右團次

○春木座初出勤だんまりよ賤女お玉役古宮より藤太(團若)お引立ちをての出加役ハ始めて見せらるゝ事故見物ケ待て居升た拵へハ賤女通常の好先おし出しハ美しい事(高助)の引付よてお目見得のせりふ有て夫ハ藤太よ色仕掛になり又古宮へと入再度の出ハ顔ハ隈取よ成て居て藤太をカセよ賤女の拵へ引扱よ成白の四天よ寶珠の玉を赤く縫た拵へ此時上手々(權十郎)下手々(小團次)出でだん

まりお成ト、後ろの松の立木へ消ると木の股へ千本櫻二の口鳥居先の場の忠信の拵へ赤地の四天禪掛よて顯れ幕よ成と云趣向此忠信の顔の作ハ東京よて是迄見た形よてハ額迄赤塗立よて劔先の様よ成て居の狐隈とて古格の有事と聞傳へ居しに(家升)のハ坂府の形が額ハ青黛にて何高見馴ぬ作り故田舎芝居見た様で甚見惡し其上坂地の役者の癖よて早替りよて顯れた時「エ、」どか何とか掛聲を仕なさきて困る別よ聲を掛ぬとてどこへ出たか見物ケ氣ケ付ずよ居者ですか馬鹿〜しい○是等も水道の水か染たら頼で直升升ふ○斯様な体裁故だんまりハ先ば、ツチイ也○川連館の場の四郎忠信の出拵へ方端中分無義經の尋問を請例の通出羽々只今立歸たる忠信也との返答の處さら〜と中分龜井(鶴五郎)駿河(訥子)兩人の引立の處も中分無こなされ升た併し出道入共よ肩を振る、故見物ケ(時藏)よ似て居る〜と云れ升の本人が聞れたら不満足の事有升ふ○團十郎の此引立の場の忠信ハ實に無類で有升た(家升子)中々遠く及ずです○狐忠信ハ親御小團次の大當り狂言三弦拔の大ケレンよて評判成しど定て今回も何が目新しき趣向でも仕らるゝ事かと思居しよグット大漉よて何おも仕す出派も花道のスツホン其分高欄

渡り杯の事もなく能狐の口の付物杯を仕らるゝ物なるが其様な事もなく都て古來々の紋切形で演されしハ大舞臺じやと感心し升た○併し靜々「サテハななハ狐じやな」と云時ハット自分ハ椽の下へ抜狐の毛衣よて出先の上下衣裳ハ上へ飛と見せて抜殻斗り上へ引上るハ有形なるが甚だ不手際にて堂しても上へ飛たと見へず此位なら返て其儘下へと入た方が美事有升○化されの出引入の件よ成時例も毛衣の肌扱で寶珠の玉の緋絆を見せるが紋切形成ケヤハリ毛衣の儘よて仕らどしが是は肌扱よ成方ケ花やかにて吉定て前のだんまりよて引扱て見せられた故なるべきかなれど淋しくて残念有升た○さて臺調遣ひ振事等ハ一點の中分なく宜こなされ升た大出来〜○十四年の春新富座よて毎日替り千本の時(團十郎)(菊五郎)ケ演されし見劣りなく出来され至大入の見物よ成しも家升子の手柄なるべし大諧覺範の見出し四郎忠信ハさしたる事なし

- 一此下東吉郎久吉
 - 一水間左京之助
 - 一鶯の者湯嶋の傳吉
 - 一山獵曲權太郎
 - 一實ハ伊勢の三郎
 - 一横川の禪司覺範
 - 市川小團治
- 升若丈久々大坂表出勤よて歸府後暫く休坐なりしが今

回當坐山勤少し見ぬ間に大きに睦が付た様お思はるゝ故
 又修行より成事なれば他國行も身上の爲と見へ升〇一番
 目此下東吉役犬清御能の場吉野(田之助)犬清(高助)兩人
 不義顯れ引立よ成んどする處へ花道を聲掛ての出拵へ万
 端申分なく貫目か無と云新聞の評も見へしが成程後年
 關白も成人なるか此時分ハ未足輕上りの人物故此位も
 ても相應成か不相替調子ハ舌の返りの悪い持前ハまだ直
 らずチト答へ兼る處も有升が我慢して置て置升ふ〇二幕
 目浪宅の場陣羽織鷹野拵へも申分なし犬清の御勘氣の詫
 をする處さしたる事なし後犬清が切腹せんとする處へ與
 方出是をなだめ先陣へ加り高名せん事を進る處もさした
 る事あり〇大詰氏元討死の場ハ拵へハ立派あるが評する
 處あり一休爰と云て澤山見せる處の無狂言の筋成故眞身
 入情入て見る場もなし〇水間左京役犬清血戰の場へ馬上
 ふて出来り立廻りの場手綱捌きハ草薙先生の指南とか云
 高評なるが我輩節穴連よハ一向見答なく後組打よなり篤
 より犬清よ我首を渡さん覺悟の由物語りの處も今一息答
 へ升ん様で有升た手負の拵へと申分無
 〇松竹梅湯島の傳吉役八百屋の場芳年筆の地獄の畫の
 どてらよ番傘を差高下駄の出邊と月代ケ有とんとしら浪

五人男の取殘されの襟でしたぞ一休今回のお七ハ吉祥寺
 の場ハ岩井家の天人お七なれど八百屋の場ハ淨るゝ狂言
 よ有伊達娘戀緋鹿子の方なれば此傳吉役ハ余度物よて
 無理よこめた物なれば一向役が無つまらん物で有升た夫
 故太鼓の場へ欠付て来る時も拵へハ此人の事なればさし
 て半天よ目倉嶋の腹掛股引長提灯よて五分も透ぬ江戸ッ
 子のチャキキ火事柳なれど役ハ極悪く出ても出いでも
 能と云とめ物只々五苦勞の事で有升た(當込の藝娼連ハ
 嬉しがかり升た良

〇山獵師權太良役是ハだんまりへ下手方の出拵ハ熊の皮
 拵へよて葉の山岡頭巾を冠り立派な事例も拵へハコッて
 居るゝ故評が宜ムり升今回のだんまりハわる長いだんま
 りよて珍らしいハ(右團次)が第一番よ引拔よ成夫より此
 人ケ中途よて肌拔よ成又一兩度入違ひよ立廻つて(權十
 良)が引むしりイヤ引拔よ成と云趣向よて一人づゝ變て
 見せるとハ随分念入な事で有升た
 〇千本よ横川の覺範花道へスツボンよてせり出し拵らへ
 万端申分無中々大手よハ仕らさしが只譯もなく今一段と
 云處なり併し爰と云て悪く云處も無ですが教經と云貫目
 備へらす殘念く此見出しよ義經が出升んですうら何と

なく淋敷殊よ詰よ二重へ上つての大見得ハ珍らしく(義
經が留主だと思つて去ながら何役も相應よこなざるハ
余程舞臺功が積たど見へ升

- 一 盛久保權阿彌
- 一 郡新助秀詮
- 一 寺澤彌平次
- 一 釜屋武兵衛
- 一 川連法眼

市川 壽美之丞

○權阿彌役氏元本陣へ注進よ來る處可笑交ての振事評吉
後氏元よ引上の事を諫める迄難なしの出來

○郡新助役氏元討死の場鎧出立の拵へ一通りよし仕打も
さしたる役なければ評する程の事なし

○寺澤彌平治役吉祥寺の場へ出る役是と天人お七の方な
れハ赤澤十内と云役よて吉三の家來筋よて異見をする狂

言の筋今回の役も其穴へ行人物よて武部源藏見た様な拵
へよてヤハリ吉三へ異見して歸る迄の役よて此人相應よ

こなされ升た

○釜屋武兵衛ハ此人の身上よなき役なれハ隨分手強クハ
仕られ升たが職掌違故惡い氣ハ誠よ少く五尤もな事何で
も引請て仕ると云迄の事

○千本櫻よ川連法眼拵へ万端紋切形よて申分なし人物が
若イ故法眼めかぬ處もわれど仕打ハ難もなし

- 一 小田の侍女立田
- 一 氏基妻朝霧
- 一 竹屋の娘お梅

中村かゝる

○立田の役序幕能の場ワキ師のツレを女で行と云趣向よ
て長唄よて一寸振事しとやうよてよし○浪宅の場始吉野
を尋ね來る處もさしたる事なし

○氏元の妾朝霧役おし出しハ人品有て立派くさしたる
役も無れハ評する處なし

○お七よ友達娘お梅役只されぬく是又さしたる役なし

- 一 小田 春永
- 一 庵原 春太郎
- 一 紅屋 長兵衛
- 一 駿河の次郎

中村千之助改
澤村 訥子

○中村千之助助高屋の養子おなられ強勢立派な名跡相繼
しられ升た過報者實ハ劇場も地ハ落俳優も末世よ成升た
歌舞伎新報にも委敷此訥子の名前の所末おならざる事が
出て居升ヶ昔より名人上手の肩書の付た役者も多く有升
が恐らく(澤村調子)程の名人も又少く方今迄訥子の形の
残て居る藝風も多く後世不双と云實事師の氏神共云つべ
き役者也○訥子一代の當り藝多き内よ人口ハ云傳しハ忠
臣藏の由良の介なり其内七段目の生醉ハ此人の得意よて
其頃新作なりし假名手本忠臣藏始て操り狂言よて出せし
時作者も人形遣ひも七段目ハ訥子の形よて演せし由夫よ

り今も劇場探り共此形残り傳りし也浮世錦畫の似顔畫も由良之助へ大概訥子の顔みて書た物なり歌川豊國ハ二世共多く訥子の似顔にて書殘さし物多し然れハ木像などよも訥子の似顔を寫した物も多有なり其故由良の介と云人ハ斯云人物で有しかと思へれるも實ハ訥子の名譽なり然るを其家相續の子孫で有ながら斯有名人の名目無懺もも下等欠出しの夫根役者よ名乗せると云ハ一本人ハ五里夢中ながら高賀子も實ハ先祖へ對し濟ない人でハ有升んか江湖芝居好の看客達其賞捧よ驚き奇もさわるも此噂のみ定て本人も過報負ケして取詮上手上等な役者よハ進れ升舞と氣の毒よ存升

○小田春永役ハ人品備り中々宜出来升た爰らハ妙な物よて名前が能成て何となく賈目ケ付たと思へ相應よ見られ升たハ不思議シテ見ると名前ハ大事な物爰と云惡口云場もなく拵へも申分なく上評

○庵原春太良役氏元本陣へ勝軍さの注進よ來る迄の役よてさしたる事なし

○松竹梅よ吉祥寺の場紅長役堂々と思て居升たよ咄々味を遣れ升た一体此役ハ古今のもうけ役よて是迄ハ大谷友衛門(中村芝十郎)(澤村宇十郎)等仕られたを見升たが

例も評判よく何レも當て居升たが今回も訥子又評判よく諸新聞よも皆々譽て有升た併し(中村千之助)よて出来さられた大手柄なるが(澤村訥子)よて紅長が宜つた日よハ余り出来た咄でもなし□コウ、何でも出来たら手柄じやアねへか何も道理を付て悪く云事も有めへ○殊よ五元方今立役敵役女形道外形親父形花車方何れも目茶の時節舊習を云ハ時勢知すか閉口、只五器用な事と譽て置升

○駿河の次良役爰らが本役忠信の引立ハ五苦路

- 一左 枝 犬 清
- 一岡崎五良三良正行
- 一八百屋の娘お七
- 一兵 卒 高 平
- 一源 九 郎 義 經

助 高屋 高助

○左枝犬清役一番目序幕能舞臺の場歌舞伎新報よハ石橋として有升たが龍神の後シテ場よて長唄出囃子よて能掛りの取作斯様な事ハ手よ入られた物は捕手掛り立廻り有てト、吉野(田之助)どの密通顯ハれ御暇よ成處斯云役ハ是まで毎度のお勤悪かるう等もなし○二幕目菅津村浪宅の場拵へ万端申分なし不斗主君春永のそれ鷹を捕へたるを手掛りよ勘當説をする處さしたる事なし○勘當の説の叶ぬを歎き切腹なさんとする處を木下東吉よ止められ

先陣へ加り血戦なさんと約する處よしと、吉野ヶ自害し
て出陣を祝ふ幕切造持前にとまつた役故さらしくと振事
され升た○桶狭間血戦の場白糸織の鎧山立の宜ムり升た
が數多の首を取た必死の働きの處故少し血に染り居方
が宜いり余り無難過て勇戦した様が無様でした□馬乗の
術が手綱の捌き方草薙先生の指南との事成が左もと思へ
ぬ様で有升た(見る人が見たら感心し升か)後水間左京と
の出逢我妻の兄なる事知れ愁歎の處今一息答へ兼升た
斯様なドンチャンの中にて引めて愁を聞せると云の中々
難い事故五尤なるべし

○岡崎正行役幸内拷問の場仁義の情よて幸内小氏元へ飲
炮を打掛し事を白状さする處是又毎度手覺の役申分なし
氏元本陣の場勝軍さの祝なりとて酒宴の處へ洲斷なりと
諷言の處何分此人斯云武道の役の口跡生ぬるくノリハリ
の甲斐ない性故大きき不評で有升た○拵へハ相應で有升
たの今一息喰足す残念

○松竹梅湯島掛緋八百屋娘か七役吉祥寺の場拵へ万端
申分なし最早年配で居なさるよも似合ず美しい事ハ不思
議ばんやりとした宜娘振でムり升近頃のメキ〜と肥満
なされたよ和らかな鹽梅又茲へ行役者ハ方今外になし併

し此吉祥寺ハ岩井家の狂言天人か七とて他流の役者の無
闇に演さぬ狂言よて本堂の櫺間の天人か七よ似て居る
處より去貴人が妾に仕度と役人をよこし召抱んど云ふ迷
惑して居るを此寺迄尋來るお驚き紅長の思付よて櫺間
の天人を下し其跡へお七を入れて天人と見せると云趣向な
るの高賀丈も中々美しく有の天人と見違るとハチト出
來過た役なり半四良の故人よ成し最早演する人も有舞と
思しよ有掛なく見る事ハ成升た扱又八百屋ハ義太夫狂
言よある「伊達娘戀組鹿子」の六冊目よて二狂言取合せ物
故大きき不感心な處有です尤も筋も通らず親久兵衛(團
若)の異見の處「かりの契りも二世迄と」のさわりの振
事ハ古今無類の甘さ吉祥寺の場ハ只おどけなさ娘の情合
斗り見せる處故左程よも見られ升んでしたの此振事へ來
ると一寸仕業の有場故此人の十八番外よ仕人無感伏
○此位地藝熟練で居ながら火の見の場をなせ人形身で逃
なざるか高賀丈の人形身も随分蒼蠅物さりとて見れば毎
度ながら請て居らるハ舞臺功と云ふのか
○だんまり前よ軍兵高平役生醉よての出(千之助)も同じ
出立の雑兵よて出て一寸酌子の名前相續させ養子よなご
れた披露の口上の五苦勞

○源九郎義経役御殿の場拵へ之紋切形故評なし四郎忠信見参の場例の「漂船してもうつけぬ義経」と云へる處の今一息強く云れずの氣早の大將との見へ兼不評で有舛た此人ハ臺詞遣ひメリハリの無故何分引立ず夫故何役を仕られても目先の變らぬ様に思れ舛○其代り女形娘形の加役での例でも勝利で有舛から一層の事身上を換たら宜らうと存舛又大詰覺絶の見出しに出なさらぬハ堂云了簡り念の入た役者の安徳天皇を抱て花々敷出らざる物をちつと斗早く御歸館なされたとて得も有舛まいに手前勝手な不勉強を親方で云る苦くしい

一春永の御臺園生
一八百屋の下女お杉

澤村門之助

○御臺園生の前ハ人品あしく御臺とハ見へず
○八百屋の下女お杉ハ吉祥寺の場さしたる事あし八百屋の場腹合の帯の中形が荒く下女の帯らしく無○夜あ入と木戸ハ一ヶゑると云ふ此犯言の山あるかお七が無駄に吉三さんハ逢度とせがむハ木戸が明ぬと云へど承知せず道人を頼んで明て貰へど云處ハ又天人お七の筋にて懸緋鹿子ハ無本花道飯花道上手下手と四ヶ處ハ木戸が出來是へ一々明て貰事を頼處が杉の眼目の處まで誰が仕ても

もうかる役例も評判能今回も此人功者よ出來され評が宜ムり升た○片手ハ鼻緒の切た下駄を下げるの例もお定りの場當りよてよしお七の狂言ハ吉祥寺よて紅長八百屋よてお杉ハお七の相手よして訴が仕てもキット評判の能もうけ役此人も連志性と得見中々にこゑされ舛たお切者

一藤屋の娘お花
一源家の侍女白梅
一川連の妻飛鳥

藤川花友

○坂東三津五郎門人よて(佳志久)とか云れた人なるよし能名前を相續よて出勤○友達娘お花のきれいと○だんまり前へ侍女白梅と云役よて白旗を持ての出此處が此人のお目見得の場さしたる事なし○川連妻飛鳥役是又出來されもせず未入せらる升ふの部を扱さらぬ様子名前前に至極立派なるが御手際ハ名題下本職らしい人何レ腕前を見たら上評し升ふ何よしる勉強の肝要

○市川團若)此人ハ(右團次)同道よて登り御目見得より新富座よて望月に神官の役斗り其後壽座よて安達原の鎌鉄直方を勤られ升たの眞事面よ宜して居られ升た今回一番目宅間玄番手強く仕られてよし○幸内詮義の場よてハ醫師何某さしたる事なし○お七ハ八百屋久兵衛が七へ異

見の處に宜して居られ升た中々な腕前頼母しく感心な
のの本文より有地獄の有様を語りお七を威すせりおの内へ
傳吉が着て居る着物の畫でも見たで有んと一寸傳吉の衣
装を爰へはめて云れ升たが本人の作意が此働きの請升た
何よしる今回評よく仕合○だんまりお早見の藤太の
可笑身もさげなく大出来

一香取小平太
一八百屋の丁雅彌作
一龜井の六良

中村鶴五郎

○香取小平太役序幕々二幕目迄始終春永の側役人物の能
故立派で有が爰と云て評する出来もなし併し人の狂言
を邪たせぬ性故無事と云べし○氏元討死の場にて鎗を付
る役さしたる事なし

○八百屋の彌作阿房の役なるが利口さうな顔付よて一向
可笑身も愛敬まなしチト無事過る方なり

○龜井の六郎の忠信の引立五苦勞

一山口九郎次郎
一能師三輪左近
一葛山彈右衛門

市川壽美藏

○山口九郎次郎役拵への愛宕連歌の明智光秀と云作おて
「繪本天當記」割普請の御馴染の山口九郎次郎とい大手變
よて國崩しの立派と云拵へ立派とい云兼升たが相應の出

來序幕より謀反を聞せて直見山に成腹を切て仕舞と云
手輕い役おして拵へと大違され立敵でハあし二枚
目位よして可成犬清の不義を見出し己の戀の怨恨を晴
したる處巧みを東吉郎に見顯され褒美として下されの臺
の物ハ死裝束成ま驚さ後腹切も成迄今少しくやしがり様
が不足の様で有升た

○能師三輪左近の老人役ハ毎度ながら斯様を役ハ手に入
られた物申分おし桶狭間の場犬清血戰の後に添ふての働
き五苦勞の後悴水間左京討れたと聞愁歎の處出来よし

○葛山彈右衛門役幸内詮義の場上下ハ黑白の横はだん
だらとんと徳川家の布交の幕の様で有升た顔の作り鬘の
好の申分おし主君氏元の駕へ鎗炮打掛し小田家の浪人也
と郡幸内女房悴を拷問の處思切て十分手強く仕らざ升
た斯様を二枚目敵ハ引請たら愛敬もあく突込て仕られた
ら屹度評ハ宜ふり升何役でも嫌あく勤る内廻り合か近頃
敵役而已當り升ヶ重寶を人故段々油がのつて來た様と思
れ升此上共勉強を頼升九郎次郎と違て團洲ツ氣を放れ
た丈見能ふり升た

一犬清妻芳野
一幸内妻おさみ
一小性吉三
一まづか御前

澤村田之助

○犬清妻芳野役序幕能の場ワキ僧を女形でするト云趣向長唄山唄子よて一寸した振事堂も躰のこなしがギゴハよて(かはる)よ劣るト云ハ濟あいな人□尻ふりを踊る様を癖のある處を直して貫度も也○犬清との不義顯れお暇お成處さしたる事をし○萱津村の場も爰と云て評する處をし夫犬清の出陣よ自害して剛ませる處もさしたる事をし○幸内妻おさみ役燈の好ハ申分無ですが着附ハチト立派過た様あり浪人者の女房なり着附の鹿末の方があわれさが見ゆる物なり仕打ハ相應おこなされ升た

○松竹梅よ小性吉三役吉祥寺の場されい〜此役ハ奇麗な若衆姿をみせてさへ居るハ外ハ役の無事故評する處なし八百屋の場もさしたる役なし何と云ても方今の花形役者故申分ハなし

○千本櫻よ靜の役押出しハ可成なる仕打ハ今少し行履さ兼升た此靜の悪いと忠信の引立ぬ大事な役なれど外も仕人もなし□靜ハ君の仰を請の處よて鼓の胴を組立調べの紐と掛て居らるゝハ床の淨るりに合て宜ムリ升た爰ハ余リ斯せぬ物なるがメレ埋よ成て至極宜思ひ付か斯するのを例も略すのか余リ見ぬ事故珍らし相よ記載し升其外一〜委しく評し升んが先中位の出来なり

一郡 幸 内
一今川修理太夫氏基
一摺 針 太 良

市川權十郎

○郡幸内役詮義の場此役と書卸よハ(尾上菊五良)役よて評判なりしが此人よハ堂云物かと思ひしよ先相應よ出来され升た拵へ万端申分なく併ハ此處丈ハ桶狭間よハ筋よハまらず申さハ是丈の狂言を別よ仕立て書込た物故勞して功なき共申べき場故只見た目丈の事を評する斗り彈右衛門の拷問よハ懸する色なく眼前よ女房子の責らるゝをもちらへ居る處も先斯な物か別て悪いと云處も見へす○後岡崎五良三良の情の詮義よ義心もくトけ南岩寺の松原よて氏元へ鉄炮を打掛しと某也と白状する處よしト、繩目を免されたるが今川氏墓ト云高札を引そぎ竹よて突通し恨みを晴し彈右衛門が突出す鎗を取て自分の腹へ突立てる處能しられ升た□花道ハ細付の出よて舞臺下手よ建て有今川氏墓と認め有高札をよらみ思入の處ハ宣ムリ升た

○今川氏墓役本陣の場拵へ万端申分なし庵原の注進よ敵方の鷲津丸根の砦を破りしとの事を聞勝軍さの酒宴なさんとする處へ岡崎正行(高助)出來り未だ全く勝利よならざる内御酒宴ハ御油斷也と諫るを聞入す返て朝霧お舞をまはさせんとする處短氣な強將の氣持よく振事れ升た○

再度の注進ハ權阿彌まで味方敗軍及びしと聞出陣なされど云を皆々此陣を引と諫るを聞入す鎧掛る處も相應よよし○桶狭間討死の場亂軍も成手負の拵へ申分なし後郡新助(壽美之丞)香取小平太(鶴五良)左右より出來り立廻りも成ト、我手も刀を首へ當生害の處まで幕後と云て評する程も有升んがさりとて爰と云て悪口云處もなし一通り難なしの出來○先此人の躰よりはまつた役故此人もしての大出來と申て可ならん

○だんまりも摺針太良役上手の板搦様の處を破つての出十二重の衣裳に塗笠にて顔を隠して(右圓次)(小圓次)との立廻り兩人兩三度大見得も成ても笠も隠れ居て後やうく此十二重ヶ板る笠を捨る大百日龍の縫の有四天の形立派なり是より又兩三度大見得も成古今珍らしい長いだんまりなり壹人つゝ引拔も成と云だんまりの余り見た事ハ有升んだんまりと云物ハ少しわつけない位ヶ能物なり今回の様も長いのハ返てアラの見ゆる物にて感心し升んです先の當狂言(右圓次)の新顔ヶ有とハ申なから大入も成しハ座頭の御手柄御仕合

○中島座狂言藝評

該狂言ハ昨十四年十月大坂道頓堀戎座にての新狂言「小笠原流禮忠孝」と云名題にて(舊小倉の色紙の焼直し物)隼人菊平おとや(福助)主膳小平次(今回八藏)か大の方(橘三良)大神(荒五良)豊前守(延三良)良助遠江守(延若)等よて演し大當りにて脚色面白く出來たる狂言なり夫故今回當座よても大入大繁昌も成升た記者も見物致し升た故(幸ひ投書も一二本有)附録として評言をお目よ掛升事も致升た何れも様も御承知の事故珍し相に中事でもムリ升ぬが該座ハ又許櫓の内でも下等劇場と見下され出勤の役者輩も中島座へ落た杯と云れ升故榮譽共思つて居られ升舞がそこが聞所名を取より徳の世の中にて大芝居の休業勝の舞臺より直安なり共一年中興行續きの座の方が家業に成と見得追々も役者の新顔が這入て名題下迄手揃も成升た故舞臺面が賑やかに成升た併し爰も否な悪弊が有て役者輩ヶ看客を馬鹿にして舞臺をソ、ツたり我儘勝手な仕打を(所謂場當り)仕なさるが誠とよ遺憾な事なりさう看客も下等斗りもなく大入も成時ハ上等見物も出る事なり(評判記で云さトき)人氣ヶ人氣を呼で大入だと聞て上等客

げ見に行た時賊しい仕打やソ、ツた舞臺を見て愛相が
盡ると云れ升から役者輩も爰を一洗して舞臺を大切に
勤る様に有度物なり斯のごとくの理由なるに依て評言
も悪く云ば片端より言ねばならず先か直段相當役者相
應の出来の分ハ大出来とか申分無とか記し置升れば
(見功者ぶつて)其段の看客様方御見分の程を願上升

狂言の旨趣ハある

狩倉の箭先よ當

狸狐と一社よ祀る

鎮守の來歴

中島座劇場榮

小倉縁邪正緯經

御註文 四端續

一賤の女おだい
一愛妾お大の方
一漁師八藏

片岡我當

○お大の役ハ佐兵衛の養女よて江戸神田明神の茶店よ出
て居時分大神お通ハ懐妊したると國へ引取を兵部ハ此女
を我妹おして大主の妾お出して出生の我胤を若君おする
といふ筋なり○序幕口繩堤の場ハ江戸より尋來りし養父
を小性山路貢(仁三郎)下部脚平(璃久三郎)と斗り殺す
場拵へハ女小性よして牀の振事ハばく連女の意氣込と云
處例の此人の十八番舞臺を馬鹿よして大ソ、リ故女とハ
見へホ女の着物と着た野郎としか思へず不評〜○二幕

目明神々獄茅屋の場賤の女と成殿の狩くらお山よ踏迷ひ
來るを内へ入色仕掛よて兵部の妹と偽りお妾よなると云
處此場も女の情合薄く堂してモ男の牀らせず評惡し着附
万端ハ申分なし○大守江戸參勤出立の場見送りよ出たる
處拵へハ立派よてコテ〜作り大名のお妾風申分なし爰
と少し女らしく成て吉殿出立の後兵部と一寸色合の處よ
し○兵部の股をつめるハ如何なもの互ひよニツメリ笑ふ
位にしてハ堂だろウ

○小笹原遠 江守書院の場榎の戸(又五郎)よ若君を抱せ
引添ての出拵へハ大立派爰ハ狐が化て代て居る隼人を本
人と思ひ駕へ入召連吟味なさんとして來りし小遠江守方
よも同じ隼人が居よ驚き遠江守と争ひよ成處ハ奸婦の性
根有て評よし○同奥殿庭先の場榎の戸と兩人よて若君を
守して居て一寸下等女の性根を表し子供をガキ呼わりし
て薄情の臺詞の處評よし○半番曾平次(松五良)が娘〜
と呼掛出來るよ見よハ養父佐兵衛なる小驚き我身の薄情
を云立意見ささるよ改心したる振を見せ透を見て懐劍よ
て殺す處の手強き仕打相應よ能こなさるよ才た○磯兵衛倅
磯次郎(鶴松)を菊多見の若徒助八(鬼丸)が連來り主人の
敵筋也と云立殺さんとする時磯次郎が遺言お守袋を出

し見せるも成取持の守袋の製と府合するが實の弟と知し
 實の兵部が責殺した百性磯兵衛(冠十郎)とし元おつゆ(一
 壽)の兩人の實の父實の姉なる事が知し是が懺悔後悔し
 て自害も成處こゝよ至つてグット器量を上て大出来でム
 り升た朝暮から此氣組で仕られたら申分無ですけ此人の
 癖まで堂も役も依て大層に可否甲乙が有升八困た物なり
 ○漁師八藏役此の筋八月本家に若徒をして居内おとやど
 不義が顯れ主勝の情ふて暇に成長濱と云處まで漁師をし
 て世を送る内おとやけ主家を尋た時作人方へ密書の使を
 云付り行途中岡田良助(市藏に)殺され此密書の一條を種
 に犬神が奸計にて月本家断絶も成しをおとやけ此狀を夫
 神家へ度したと疑と請月本源藏(吉彌)若徒與平(冠十郎)
 兩人尋來り始終を語りおとやけ討んとするを此詮義を
 引請吟味せんとしたるを内へ歸りしおとやけ幽霊よて幼
 子に引され來りしよて良助に討れたる事も分り是が女敵
 討んと非人と姿を變尋廻り柳ヶ測にて逢良助を討本心
 を聞て犬神の連判狀を受取御國入の遠江守に差上後証據
 人よ出ると云筋の役なり○城外おとやけ殺しの幕切へ一
 寸出る處さしたる事なし内の場拵へ之堂しても漁師とい
 見へお妓夫か箱屋としが見へす後よ若替た拵へハ仕事着

の長半天か知んが肩の處へさして成て裾へ巾廣く黒木
 綿がふきの様よ出て居る着附何だか依体のわからぬ拵へ
 なり○門口の様子を伺ふお柱へつかまつて一寸見得をし
 たり實は仕打の一々云升んが亂暴な有様なり殊も舞臺を
 ナゲて見たリソ、ツテ見たり言語同斷兎角此人の此風が
 有升が久敷見ぬ内堂か成たかと思つて居升たがヤハリ直
 り升ん困た代只物なり○水車の場も立廻りも大ソ、り大
 變一評定の場へ出る處も麻上下を着て鉢の振事漁師が
 俄に斯云場へ出たと云腹成が大違の了簡場當り斗り好だ
 物也此八藏の腹からの漁師でハ無元の月本の若徒故昔へ
 歸たと云氣込でなくハ濟升舞斯云トンチヤな心得よてハ
 未が思ひやらる、也併し不思議に人氣が有て殊に女請の
 すると云も仕合なり□此女請のすると云性根うら割出し
 た物と見へ始終狂言よも構はす機敷や土間の女の居る處
 へ斗り目を配つて其見悪い事甚だしふムり升此眼遣ひハ
 此人斗りでもなく座中一統の悪風なり其内此舍弟丈を以
 て第一等とすア、歎かとしく○正面を見て居るハ舞臺
 の立なる故宜いけ横目を遣うと云物の甚だ狂言不際る物
 なり

一月本の召仕吉野
 後に良助女房およの
 一雫人妻眞弓

嵐 大三郎

○長助女房およの此役ハ夫長助の行取知事ニ成し後母お
うら(冠十郎)娘おもき(鶴松)悴良吉と三人と養育して困
窮暮す内おのやの亡霊が毎夜一來り四人の者を惱す
と云筋此人愁の十分で有升が大きな老年にならば貧窮者
ゆえ白粉ツ氣なく着附も極穢な拵へ故何分お婆ア三小見
へて母は詞も未三十の若い身故と云さるゝ似合す良助
のお袋見た様なり一故釣合惡敷真よせまらずおしい事
す○善心よ立返つた良助と屬さんとて母諸共自害する處
仕打ハ申分なし

一月本主膳
殿村左門之助

勝川又吉

○月本主膳ハ大神兵部此悪事を覺り本一家なる方堂か諫
て善心お成んと百性共お出訴の狀と見せて意見せし處改
心成たも偽り此訴狀を取て引裂捨て上よて惡口雜言なし
たるを堪へ殿へ内訴なさんと書面を認め是を菊多見政次
郎(三津之助)に頼歸宅なしたるお此内訴を大上よ奪は是
を種よ讒言なし菊多見を手討おなし其上月本の閉門と成
たるも菊多見の若徒助八(鬼丸)主人の首を持參なし主の

敵也と入來るに驚き始終の次第を密書お認め丁度尋來り
しおとやに隼人方へ届る事を諾し自分ハ腹切て菊多見へ
報ると云筋其後殿參勤發足の砌玄關先よて亡魂と成て
出隼人出牢の事を願と云役なり○拵へ万端申分なく近頃
舞臺功が顯れて藝ハソッキリ締た處の出來斯様な老人役
も大きに見答け出て來升た○併せりふに片言多く聞苦
しく一々記し升もぐだぐだしけれハ略し升ケチト注意な
ざる様よ祈る○亡魂よ成て殿の御前へソッポンおて兩度
顯る處も拵へも申分なし大出來

○殿村左門之助役ハさしたる役前でも無と遠江守(幸
藏)家來おて大神へ隼人引取お行るゝ役相應よして申分
なし

一菊多見政次郎
一奥女中尾澤

坂東三津之助

○菊多見ハ豊前守の小性よして山狩の供よて茅屋へ來り
月本の内訴を頼れ殿へ差上たを落度よさき大神の手討よ
成役○序幕百性共の訴狀を預る處さしたる事なし狩の場
拵へも申分なし仕打ハさして評する處もなし可否共無相
應の出來

○奥女中尾澤ハ腰元おつてもお頼とお錠口の鍵預り故大神
主税よ逢せて遣んと手引したる事が露顯し兵部の吟味お

逢切殺される役○さしたる事なし難ずる處も譽る處もなし一通りよてよし

一月本源三

坂東吉彌

○此名前ハ故人坂東三津五郎幼名なるが相續の因縁も有べきかなれと坂東松次郎と云た子役かと思覺へて居升げ後日よ調へてくわしく源三の若衆形一役さしたる出来もなし

一犬神主税
一小笹原遠江守

尾上幸藏

○主税ハ兵部の弟よして兄と違立役なり自分ケ密通してゐる腰元おつ也(壽)が兄兵部を毒殺なさんとして薄茶の中へ入持来りしを覺られ親磯平(冠十郎)共よ責苦よ逢を見兼おつゆと左様な悪意の有者で無と保証よ立潔白を顯さん爲よ茶碗の茶を香吐血して死ると云筋の役なり○序幕八幡宮の場不禮せし族人を衆が手討よ成んと云を助て遣り當地の者でハ無様子何處の者と尋し處江戸出生の佐兵衛(松五郎)と云者よて娘を犬神様よ上たを尋よ來たの也と語るを聞兼て兄が腹變りの妹也と云て此程養ひ置ハ扱ハさうりと心付時今一層仰山に思入有たし爰らハ大事な處なるに十八番のさつぱりよて困る○山狩のお供の處にさしたる役なし兵部郎の場おつ也が部屋へ忍び來る色

合の處さら〜として吉おつ也拷問の場茶碗の毒を知すよ吞て死する處も一通よて申分なし○始終今一息と云處ハ此人の持前なれば免す

○小笠原遠江守ハ本國入部の時柳が測にて八藏が連判狀を請取處鉄炮を駕へ打込れ落命したと見せ供廻りの内方赤合羽の形よて出衆よ無事を見せ討れたるハ家來副島三左衛門よて其後隼人を犬神方へ引渡せの使者を遣たる處集人ハ靈狐ヶ入替り來るを預り置後よ歸國の豊前守よ犬神の悪事を談し委任狀を請大守よ代り兵部を吟味し小笠原家安全を斗ると云筋の役なり○柳が測の場八藏が証據物を請取處さしたる事なし人数の内方實の遠江守赤合羽中間の拵へよて出る處ハ見物の目を付安心する役前故大きに評よし○城内の場お大の方と兩人の集人吟味の爲に首掛の誑合申分なし同評定捕物の場拵へ万端申分なし品格も有て難無の出来○お大の方の供よて來りし加役四人の女中を相手に長廊下にて一寸立廻りヶ有升たが是ハ無理な趣向なるが此人の場當りの處よて殿様らしくない浮雲い立廻りなり斯様な事ハ筋よも有相も無事よて劇場には折々有事なり又分もわからせ見物も嬉しがり升ハ妙奇物なり殊に柔術の立廻りにて不感心〜

一犬神兵部

片岡市藏

○犬神ハ此狂言の立敵よして自分ヶ江戸在番の御馴染だ
茶屋女お大の腹に出来た子を世に立んと悪討を工とお大
を我妹也と大守の妾に差出し集人月本を説言にて押到し
執權の威を震つて民を惱したる悪事も中途よして露顯し
召捕に成と云筋の役なり○二幕目明神ヶ嶽山狩の場集人
ヶ大守に助命を乞助たる子持の狐を射ての出拵へ万端申
分なし人物も思の外品格有て能集人の所行を不忠成と云
破りたるに大主大いに嗔り扇を持って打と云付り集人を打
處手丈夫よてよし○同茅屋の場ハ妹お大を賤女よ仕立殿
をたぶろくし妾に近め込處よし月本主膳ヶ百性共々差出
したる訴狀を種よ異見するを改心なしたる様に見せ此訴
狀を訛き取引裂捨て夫々散ぐに悪口する處手強く仕ら
れて吉○大主江戸參勤見立の場ハさしたる事なし評定の
場ハ手漣ぐハ遣れ升たヶ証據物等數多にて忽ち伏罪に成
ハ手輕にて面白味ヶ無様でした大結捕物の場ハ大立廻り
伊達の仁木丸だしで有升た大働さし後集人の情よて我
子に家名相續さすると聞腹切て死する處大出来し一跡
今回の犬神ハ例も違大さに品格も有て余程仕打大手に
成れしハ此人も幾分う敵役の身上を任上られたと見へ升

夫故町中の高評にも犬神と良助の出来を譽れるどハお手
柄を事なり○柔術の立廻りハ目新らしい様なれど刃物を
持て居らるゝ故大さに無理な様に思ハれ升た前の處へ手
を廣げて扣へる見得ハ柔術の方ハ有事ならんヶ余り度
々にて蒼蠅おもハれ升た

○岡田良助ハ小笠原家の足輕よして兵部よ荷擔して集人
方へ使よ行おとやを殺し密書を奪ひ犬神よ手渡し成たる
處百兩の褒美を貰ひ妻子は我が仕送り遣す程よ逃亡せよ
と云れ其信影を隠し久々よて我家へ歸り來りし處女房の
咄よ毎夜女の死靈ヶ來り惱そ由を聞其上兵部ヶ仕送り處
か手本金百兩を盜逃亡なしたりとて屋敷を追拂ハれたり
と聞たるよ兵部ヶ薄情を怒り心中よ改心なしたれど態ど
邪見な事を云母女房を離別なしたる處娘おもさヶ自害な
したるよ彌々心決し乳呑子を差殺したるよ母女房ヶ自害
して決心を堅めさせんとせしよ我身一身に成夫ヶ犬神方
へ忍び入連判狀を盗出たる處八藏よ山逢女房の敵也と立
廻りに成ト、手負よ成てから心腹を明し八藏よ証據物を出
渡す處へ小笠原遠江守入部にて通り掛り是へ証據物を出
し死すると云筋の役也○城外おとや殺しの場人物を今
一息安く作つたら如何犬神と格別の違無様で悪し集人の

家來と偽り密書を請取んとするよ渡さぬを殺すと云處おとやと連立行間東のあゆみ大あゆみへ掛り本花道が舞臺へ來る此間木なしよて道具替り城外へ來る此間雨の降てる處か自分傘をさして居るけおとやハズテ濡よておかしい愛ハあゆみの間ハ相合傘と云譯にハ行舞から雨止だ事にして傘と疊で歩行たら宜ろう○殺しハ一通りよて評なし死骸を堀へ打込で行んとして引戻しよ成歸り來るよ兵部よ出逢(丁度能都合)褒美の金を貰ひ逃亡する處さしたる事なし○内の場花道の出旅形よて酒よ酔無代よて酒を呑だる振よて酒屋が付て來るを無躰よスツパ扱よて威し歸を處よし内へ這入んと門口を叩くと人なくして明に不審ける處淡み有てよし○夫が女房よ留守中の咄と聞母親よハ強異見よ逸兵部の仕打を惡み改心と成たれど態と邪見な事を云處中々宜して居られ升た後娘の自害よ彌々決心して子供を差殺す處ハ手一ぱいよ振事て見せられ此處中々評が宜ふり升た○母妻房の自害よ氣を勵し出行處申分なし大神屋敷忍の場さしたる事なし柳の測の場八藏と立廻り有て手負よ成證據物を渡し頼る處ハさらしとしてゐる丈の事ト、遠江守よ訴への處迄申分なし此長助助も大當り大出來よて今回(片市文)近年

よない評判なりお手柄

一 小笠原豊前守 一 菊多見の若徒助八

市川 鬼丸

○豊前守役明神ヶ嶽山狩の場拵へ刃端申分なし子持の白狐を射んとして追掛來るを深禰等の武士が大言とくを惡し射て取んとして手裏に請られたるを驚き諸士に出付笠と取吟味せんとしたるに隼人にて是が隼人ハ殿の乱行を諷め先代の位臆を出し打擲なし強諫するに無余儀聞入る處にて恐入たと云れ升たが此詞甚だ惡し東京の舊習にて(他國にも有か知んげ)譯も無事に此詞を云れ升た或ハ恐入たが下駄を取て下されの恐入たが鼻紙一枚頂裁なと、能云れ升た一體大主杯ハ無闇と恐入たと云詞遣ひハ無管なり殊相手ハ家來なり爰らハ注意して直て貫度もの○同茅屋の場賤の女を見初口解よ成處玄なだれ寄で口解處ヶ領主の威勢ハ少しもなく二枚目敵かなんどのする振事よて甚だ見惡し○江戸出立の場拵へ申分なし主膳の亡魂に逢處も申分なし○後の城中の場遠江守と隼人三人にて評義の處是返の始終を處家よ咄すよお聞下されと云れ升たが此詞もチト町噺過て惡し人品ハ随分品格有て申分なし此詞遣ひ丈直つたら上評なり

○若徒助ハ此役の菊多見政次郎がお手討よ成家名斷絶よ

成しも月本主膳が内訴の取次をさせたからの事故主膳を討て此遺恨と晴さんと主人の首級を持参して踏込來ると云筋也○此助八の持へ花勝負皮の中形は角字の染抜たる着附の堂云思付が殊に力紙を付て居る時代過て悪し後ふ主膳切腹の介錯の時肌と腕と淺黄地は大形よて紺の龜甲つなぎ是は又男達の様で可笑やハリ通常の絞が杯でなくてハ成升まい○仕打ハ難する處もなし遠江守御殿の長局妹咲野が部屋は忍び居る處ハ希有な筋なり本文なら是非もなし評ハさしたる事なし後磯次郎を主家の敵の筋也と偽りお大の方の見出しの種は打果さんとする處もさしたる事なし○強平を打取處も一通りよて評なし

一 小性山路貢

片岡仁三郎

○山路貢の悪小性ハ始終兵部の手下よて悪事を働らく役爰と云て出來た處なしさりとして悪く云處もなし

○齊坊主了念役良助内へ百万邊よ來たる役さして可笑身もなしさしたる事なし

一 下部強平

嵐 璃久三郎

○下部強平役芒原の場狐の通力よて宙へ引上らるゝ處吉兵部郎おつもの拷問を云付り松の木へ釣上げ責る處手強く仕られてよし

○成瀬齊宮ハ遠江守家來よて奴菊平が隼人の使よ來るを取次丈の役さしたる事なし

一 一月本の若徒興平

嵐 冠十郎

○若徒興平役月本源三ハ差添八藏の内方後小笠原家評定の場へ出る役爰と云て出來したる處なし只穩便で難無○百性磯兵衛と元菊多見の若徒よて主家の滅亡は大神の祈爲也と恨み堂がなして敵を討度と娘おつゆが犬神家よ奉公してゐるを幸ひ娘よ逢て毒殺の事を逢付たるよ此一件露顯し自分も召捕れ拷問ハ逢後に舌を喰て死ぬると云筋此親父役ハ一通りよし何と言ても老年故親父役ハ躰よとまり申分なし

○良助母おうら役久々よて歸宅の悴良助の悪事を責て折鑑して異見の處は是亦此人よハまつた役前故大出來後よ自害して良助を勵ます處十分よ甚へ升た

一 一と元おつもの

中 村 壽

○腰元おつものハ犬神家よ勤居て弟主税と密通して居女也親磯兵衛も頼れ古主の敵又國家の爲と聞兵部を毒殺せんと薄茶の中へ入て呑さんとして顯を何者よ頼れたか白狀しろと庭の松の木へ釣上げ拷問ハ逢後ハ舌を喰て死る

と云筋の役なり口序幕八幡の場のさしたる事なし兵部郎の場親も毒殺を頼る處ざしたる事なし主税も逢度一心より鍵當の女中尾澤(三津之助)も頼手引して貫主税の部屋へ忍ぶ處もさして見處あり○兵部が茶をもてと云より幸ひと薄茶を運びたるよ此茶のあやしきとて見留られ拷問も成し舌を喰て死る迄可成よハこなされ升たが今一段と云處なり○咲野と遠江守家の女中なるがおつゆと拵へが同じ様よて悪し堂かおつゆが蘇生して來たやう也兄助八を我部屋へ忍ばせ置たるよ山路貢も見顯を難義よならんとする處を殿村左門の情よて助ると云處までさしたる事なし

一長助娘おゆき
一磯平倣次郎

中村鶴松

○長助娘ハ親長助の悪事を歎き自害して諫る處ハ能ハ仕られ升たけ悪い振事よて咽へ刀を突込でから落詞が長過殊よ親よ刀を取上られてのせりふ故中よ仕悪いやうよ見得大きよ痛く無様で見苦しがつた爰らハ七分通りせりふが濟でから突込たら宜らうよ(壽三郎丈)注意してお遣なされ○磯次郎ハ覺着附共余り人品過百性の倣とハ見へ兼升た二役共よ仕打ハ能ヶ申分有て残念

一小笠原隼人
一下部彌平

中村壽三郎

○小笠原隼人明神ヶ嶽山狩の場羽織踏込袴深縹笠の拵よて大守の狩を諫言の場拵へ万端申分なし子持の白狐を理を盡し助んと諫めたる處殿の聞入たるを狐よ聞せ逃し遣りたるに犬神兵部此狐を遠矢よ射殺し大守へ讒言して殿より折鑑を云付り隼人を打居る處額へ疵付られたる無念をこらへる處申分なし○大守始め衆上手へ這入た跡へ月本主膳出來り兵部と差違んど云をなだめ説諭の處もさらくと吉道具替り麓芒原の場月を詠め歎息して國家の安危存亡へ月をなぞらへたる臺詞の中よ「月ハ隈無をのみ見る物かな」と云れ升たか是ハものかハと云れなけれバ成升舞甚だ氣無の事也○爰へ犬神荷擔の侍大勢暗殺せんとするを立廻りある狐火もえて隼人を助る事有て大勢を追遣る中間強平ハ宙へ引上らる、此道具替つて立たる處へ供廻り大勢お迎と出來る此駕へ乗大勢の供ハ狐の面の付物を被り行列よて花やかハ花道へと入○此處ハ別して評する處もなし一通りよしと云迄なり○入牢の場ハ月代の生た鬘も黒の着附ハ通常宜れ共鬘が生て居升んでしたが丸一年も入牢の人なれば鬘の生ぬハ如何の物なり

半番曾平治の手引よて奥方真弓よ逢愁の處さしたる事も
無れど遺よ此人の事なれば申分無の出来○遠江守御殿の
場預りの身よ成て居る處へお大の方が又候隼人を同道し
て來り二人同じ様成に衆よ驚き吟味よ成處此處の拵へ實
の隼人の方ハ黒の鬘斗目染の拵へ又狐の隼人の方ハ鼠よ
鬘斗目染なり何れも好の拵へこんなものか爰よ至てハ髭
の無方が都合が宜しいか○狐の隼人よ成又實の隼人よ成
始終早替り中々開しい事有升た○豊前守へ目見得の上
犬神の惡計詮義の件を云付られ道具替つて兵部吟味の場
まで一通りの事よて爰と云て可否なし

□此處よておまけよ評し升ハ半番三人の者なり中間の拵
と甚だ悪しヤハリ曾平治(松五郎)の様よ足輕よしたら宜
たろうよ曾平治が同役の者がと云のが釣合惡くておかし

○奴菊平實ハ明神が嶽笹原狐の役ハ明神が嶽麓芒原の場
よて縫ぐるみの狐が藻を冠り水よ姿を寫して芒原へと入
と赤塗立の奴(隼人と早替りなり)よて出行列の跡を追て
狐六法よて花道の引込此處場中大請でムり升た○又牢獄
の場にてハ隼人が牢へと入と狐出てつなぎよ成早替りよ
て奴にての出牢の前よて女狐が恩を請し事を影身よ付添

報恩よ隼人を守りし事を床の淨るりよて振事有て遠州公
の邸へ使に行ん事を乞書狀を請取花道の引込に成處ハ大
時代狂言の仕打すべて場當り澤山此人よハ打て付の役前
よて大出来し

○八藏女房おとや役月本主勝郎へ無沙汰見前よ來りたる
處幸ひ一大事の使なりとて隼人方へ書狀の届を云付り出
行處を敵役兩人よ考付れ跡追掛行岡田良助と斗り殺され
此一念良助一家よ崇ると云筋○元屋敷奉公した者とと云
あがら今でハ漁師の女房余り人品の作りが能過て惡し仕
打よおゐてハ爰と云て申分ハなし○八藏内の場幽靈よて
歸り來り一子磯松よ別れをれしむ處一通りよし後大勢の
漁師が御堀の魚が拂下げよ成今日更堀をした處おとや殿
が殺されて有たと死骸を持て來たるよ死靈は消ると云筋
にて跡ハさしたる事なし○良助内の場へ幽靈よて出る様
に書本ハ有升たが人魂斗りよて本躰を見せず濟され
升たが至極宜ムり升た出たを返て凄く覺へ升た大請し
○何よしる狂言の脚色面白いとて古今の大入に成しハ坐
頭の手柄お骨折し

投書家八名

立見小僧 尾蝶子 威々能

本郷ヒイキ 音 丸 淺草壽

柿の實坊 横濱村八 五蘭庵

○引續後編發兌仕候間評言陸續御投書奉希望候

明治十五年 出版御届 壹圓拾貳錢
十一月七日

日本橋區堀江町

貳丁目貳番地平民

編輯兼團扇 出版人 密柑 問屋 植木林之助

